



ちとせし
千歳市

北海道の空の玄関、新千歳空港（千歳市）。飛行機の発着が多く、たくさんの人でにぎわう中、航空会社のグランドスタッフ（地上係員）は、お客さんが安心して飛行機に乗れるよう手伝います。こども記者が北海道の航空会社、AIRDO（エア・ドゥ）のグランドスタッフに密着しました。（中出幸恵）

時間通りの運航空港で支える

こども記者見ぶん録



飛行機の搭乗ゲート前で三上さん（左）から話を聞く、大谷美月さん（中央）と安藤奏さん（いずれも浜本道夫さつえい）

「お客さまをサポートするグランドスタッフの仕事は、やりがいがあります」と説明する三上さん（右）



三上さんに仕事道具を説明してもらいました。
胸ポケットにあるのは、乗客名簿の点検に使う蛍光ペン、ボールペン、定規で「特に定規が重要。手荷物の検査場より先は、乗客も航空会社の社員も刃の長さが6センチを超はさみを持ちこめません。」「定規は、はさみの長さを測るほか、紙を切る時使います。」「仕事内容を書いたメモ帳、無線機、領収書におす印鑑も持ちます。」



エア・ドゥのオリジナルグッズを小学生3人にプレゼント。応募は、まなぶデジタル「参加しよう もらおう」QRコードから。12月5日締め切りです。

エア・ドゥ地上係員 笑顔で安心お届け

取材したのは、安藤奏さん（江別市・大麻西小6年）と大谷美月さん（札幌市・北海道教育大付属札幌小5年）です。エア・ドゥは1996年に誕生し、新千歳、函館、旭川など道内6空港が拠点です。うち新千歳は羽田や仙台、福岡など国内5都市と1日19往復38便を運航しています。

「ここが搭乗口です」。水色と紺色の制服を着た入社3年目のグランドスタッフ、三上愛佳さん（22）が案内してくれました。エア・ドゥのグランドスタッフは3人1組で担当します。

午前10時55分。グランドスタッフは、搭乗口で11時20分発の羽田行きの準備を進めていました。安藤さんは「飛行機に乗る前はワクワクする」とうれしそう。三上さんは「通常はゲート通過を手助けする2人、アナウンスとパソコンを操作する責任者の3人1組で担当します」。

11時に搭乗が始まりました。乗客が搭乗券を機械にかざし次々とゲートを通ります。大谷さんは「大変なのはどんな時ですか」と質問。三上さんは「お客さまが来ない時。おなかの底から大きな声を出して名前を呼びます」と答えました。

急に乗らなくなった人や、別の便に変わる人もいます。出発がせまる中、責任者は搭乗者の人数確認や荷物を下ろす指示が必要で「飛行機の中や外と連絡を取り合い、時間通りの出発を目指します」と三上さん。

三上さんは高校生の時、職業体験でグランドスタッフを見て「制服のかわいらしさにあこがれた」そうです。この仕事を指すには「体力が一番必要です」とアドバイスしました。取材を終え、大谷さんは「エア・ドゥに乗る予定があり楽しみに、安藤さんは「空港に来たらグランドスタッフに注目したい」と話しました。三上さんは2人に「エア・ドゥで、いろいろな所に行ってみてくださいね」と笑顔で伝えました。

くまなく素早く 点検・修理 整備士

航空会社にとって安全と出発・到着時間を守るの、とても重要です。航空会社の信頼を支える整備士の仕事を、こども記者が取材しました。

新千歳空港でエア・ドゥの機体を担当する整備士は22人。その1人で11年目の中村駿介さん（32）は「通常は1人で1機を担当し、飛行機の外も中もくまなく点検します」と言います。

主に飛行機の到着後、乗客の移動中に作業。機体の傷、コックピットのボタン、客室の椅子などを調べ、こわれていたら素早く直します。1日3機ほど点検し「到着から出発まで35分で作業する時もあります」と言いつつ、こども記者は

早さにおどろいていました。仕事道具は機体の故障内容や修理に必要な部品を同僚に伝える無線機、ヘルメット、大きな音をささげる耳当てなど。ドライバークレーンといった工具が入った小型ポーチをスポンのポケットに入れていて「ねじのゆるみなど、すぐ修理できるように持ち歩きます」と見せてくれました。

大きな修理や部品交換の際は、工具箱を持参します。例えば288人が乗るボーイング767-300型の一番大きなタイヤは直径1.2メートル、重さ1200キログラムあり、平均で月に1回交換します。整備士になるには「飛行機を見たり乗ったりして、興味を持つのが大切」だそうです。

「時間通りに飛行機が動き出した時は、ほっとする」と中村さん。乗客と接する機会はまだありませんが、こども記者に「手をふって飛行機を見送るの、うれしいです」と伝えました。